

● FCP普及・戦略研究会

FCP の自立的展開を促すために、広義な意味も含めた「普及のあり方や普及方法」に関わる研究と実践的取組を行うことを目的とします。

この研究会は、東京大学大学院食の安全研究センター中嶋康博副センター長、オラクルひと・しくみ研究所小阪祐司代表、(株)アール・ピー・アイ長澤博英代表取締役を発起人とし、アール・ピー・アイを運営事務局として情報共有ネットワークの皆様に参加を呼びかけられます。

本年度の研究会では、次の3つの研究活動を中心に議論が進められるとのことです。

- 1.食の信頼向上活動の新たな取組に関する研究
- 2.FCPの持続的展開のための取組
- 3.多様な普及啓発活動の推進

これまでの調査結果をとりまとめるとともに、特に、食品事業者における「信頼度指標」の開発を目指します。また、議論を深める場として、学会等との交流・連携の可能性を検討します。

回	開催日	議事次第
第3回	平成25年 2月1日(金)	1. 開催のご挨拶 2. 本年度の研究・活動報告 1) 秋季大会開催結果報告 2) 本年度の調査結果報告 3. 普及促進に向けた課題の検討 1) 3年間の研究成果と課題 2) 産学官連携による普及活動の展開 3) その他の検討事項 4. 閉会のご挨拶
第2回	平成24年 11月17日(土)	1. 日本フードシステム学会会長のご挨拶 2. FCP事務局のご挨拶 3. ご講演 1) 「フード・コミュニケーション:FCPから発展した新たな概念」 2) 「FCP研究会・勉強会の平成24年度の活動について」 3) 「FCP地域ランチにおける産学官連携:岩手ランチの取組から」 4) 「企業の信頼指標構築の取組:FCP協働の着眼点を利用して」

		5)「FCPにおける協働の枠組みの構造と発展可能性」「ワークショップの進め方の説明」 4. ワークショップ「産学官連携による食信頼向上へ向けた新たな取組の可能性」 5. 閉会のご挨拶
第 1 回	平成 24 年 7 月 17 日(火)	1. 開催のご挨拶 2. 研究会の開催にあたって 3. 研究・活動の概要 1)昨年度研究・活動内容の要点 2)本年度の研究・活動内容 4. 研究会の今後の活動展開 5. 参加者からのご意見 6. 閉会のご挨拶

第 3 回 FCP 普及・戦略研究会の概要報告

日時： 平成 24 年 7 月 17 日（木）13：00～15：00
場所： 政策研究大学院大学 1 階会議室 B・C
出席者： 25 事業者/組織 31 名

＜議事次第＞

1. 開催のご挨拶
2. 研究会の開催にあたって
3. 研究・活動の概要
 - 1) 昨年度研究・活動内容の要点
 - 2) 本年度の研究・活動内容
4. 研究会の今後の活動展開
5. 参加者からのご意見
6. 閉会のご挨拶

＜議事概要＞

本研究会の幹事企業である（株）アール・ピー・アイ長澤の司会進行のもと、はじめに「F C P 普及・戦略研究会」の幹事である、東京大学食の安全研究センター副センター長 中嶋先生より、開催のご挨拶をいただきました。

また、農林水産省フード・コミュニケーション・プロジェクト（F C P）の田中様より、ご挨拶をいただきました。

次に、東京大学の細野先生より、昨年度の研究結果として、消費者を対象に（原発事故以降の食品安全をめぐる市民のリスク行動等をテーマに）実施したインターネット調査の集計・分析結果や、「店舗メディア化」実証実験（店舗で F C P 関連のメッセージ、企業活動等の情報を提供することで、消費者の「意識・態度」及び「行動」にどのような影響を及ぼすかを検証し、情報発信のモデル構築をおこなう実証実験）において実施した消費者アンケート調査の集計・分析結果等についてご説明をいただきました。

また、本年度の研究・活動内容（信頼度指標の開発や、「店舗メディア化」の検討課題など）について中嶋先生よりご説明がありました。

次に、本研究会の今後の活動展開（「F C P の持続展開のための取組」として、「学会等との交流・連携の可能性検討を行う」方向性）について、政策研究大学院大学の神井先生からご説明がありました。

以上のようなご説明内容について、本研究会の幹事であるオラクルひと・しくみ研究所代表 小阪様と、東京農業大学の中山様よりコメントをいただいた後、参加者の皆さまからも、ご意見と自己紹介をいただきました。主な内容は、以下のとおりです。

- ・ 震災後、消費者の食品安全に対する意識が変わっていると感じており、産業界への影響もある。細野先生の研究結果に興味深く伺った。
- ・ 一般消費者へのF C Pの普及が必要。消費者やメディアにも参加を促して、一緒にディスカッション等を行ってはどうか。
- ・ 中学生や高校生にF C Pについて話をする機会があったが、理解度が高いと感じた。今後、中高生にもF C Pについて知ることができる活動を行うのもよいのではないか。
- ・ F C Pに賛同している企業・団体が増えたため、F C P賛同者を把握することが難しい。今後、F C Pマークのバッジ等を制作して、賛同者であることがお互い認識できるようにしてはどうか。
- ・ 中小企業におけるF C Pの普及が進んでいないように感じるので、今後の普及に期待する。
- ・ 社内外への普及に、自社なりに取り組んでいきたいと思う。
- ・ 学会との連携の方向性は面白いと思う。
- ・ 大学関係者が食品の業界について理解を深め、学生教育にもつなげてもらえることに期待する。
- ・ 様々な立場の方が参加して意見交換を行えるのは珍しいことであり、今後も期待している。
- ・ F C Pの他の研究会（企業力アップ研究会等）とのコラボレーションにも期待する。
- ・ F C Pに参加することで、フードチェーンが見えやすくなったと感じている。
- ・ 昨年度は他の研究会に出席していたが、本研究会の内容に興味をもって今年度から参加することにした。

最後に小阪先生のご挨拶で第1回F C P普及・戦略研究会を閉会しました。

（文責 RPI）

＜配付資料＞

- 資料1 参加者名簿
- 資料2 「F C P普及・戦略研究会」の概要
- 資料3 昨年度研究結果の要点
- 資料4 F C P普及・戦略研究会の今後の活動展開に関するご提案

※資料3：仮集計結果のため非公開といたしますが、研究結果は論文発表後に公開予定です

以上

第1回 FCP 普及・戦略研究会 参加者名簿

平成24年7月17日

株式会社アール・ピー・アイ
株式会社アイ・エス・レーティング
味の素株式会社
イオン株式会社
株式会社イトーヨーカ堂
一般社団法人インターナショナル・バリューマネジメント協会
オラクルひと・しくみ研究所
花王株式会社
キューピー株式会社
キリングroupオフィス株式会社
株式会社鶏卵肉情報センター
株式会社ケット科学研究所
サッポロビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
株式会社スコラ・コンサルト
政策研究大学院大学
株式会社高島屋
合同会社 TFMHY 研究所
東京大学
東京農業大学
日本マクドナルド株式会社
株式会社 BML フードサイエンス
三菱商事株式会社
森永製菓株式会社
LinguaLux

(企業／団体名五十音順)

※個人情報の関係上、参加者の個人名は省略させていただきました。

平成24年度 フード・コミュニケーション・プロジェクト

「FCP普及・戦略研究会」概要

- 1. 研究の目的とテーマ -----1
- 2. 研究活動の流れ -----2
- 3. スケジュール -----5

◆参考：H23年度 参加企業／団体

平成24年7月17日

FCP普及・戦略研究会 幹事会

1. 研究の目的とテーマ

1) 研究会の目的等

本研究会は、引き続き産官学協働によるFCPの自立展開を促すため、FCPの普及に関わる研究と戦略的取り組みを行うことを目的とします。

また研究のひとつである、H23年度実施した東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故による食品事業者のクライシス対応の実態と消費者意識の変化等に関わる調査結果を踏まえ、消費者に与えた影響を総合的に検討します。

2) 研究・活動内容

本年度は、以下の研究・活動テーマ(テーマ1は農林水産政策研究所研究委託事業と連携)に取り組めます。

1. 食の信頼向上活動の新たな取組に関する研究

- ①食の信頼回復・向上のためのシステムの開発と評価
- ②消費者との対話手法の開発と評価
- ③食の事件・事故の風評被害等に関する影響評価
- ④「食の信頼論」についての検討

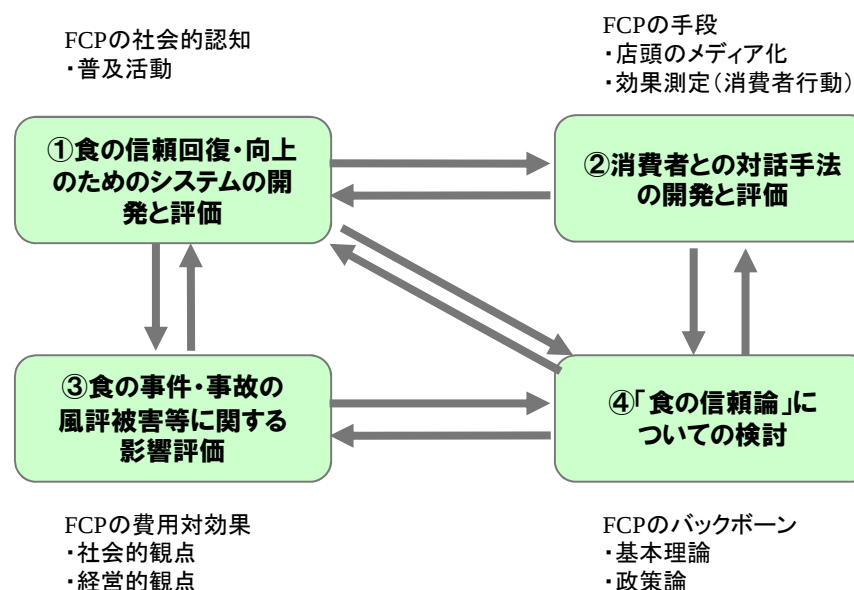
2. FCPの持続展開のための取組

- ①学会等との交流・連携の可能性検討
- ②普及活動の再構築

3. 多様な普及啓発活動の推進

- ①出版活動による普及啓発
- ②facebook等のIT活用による普及啓発

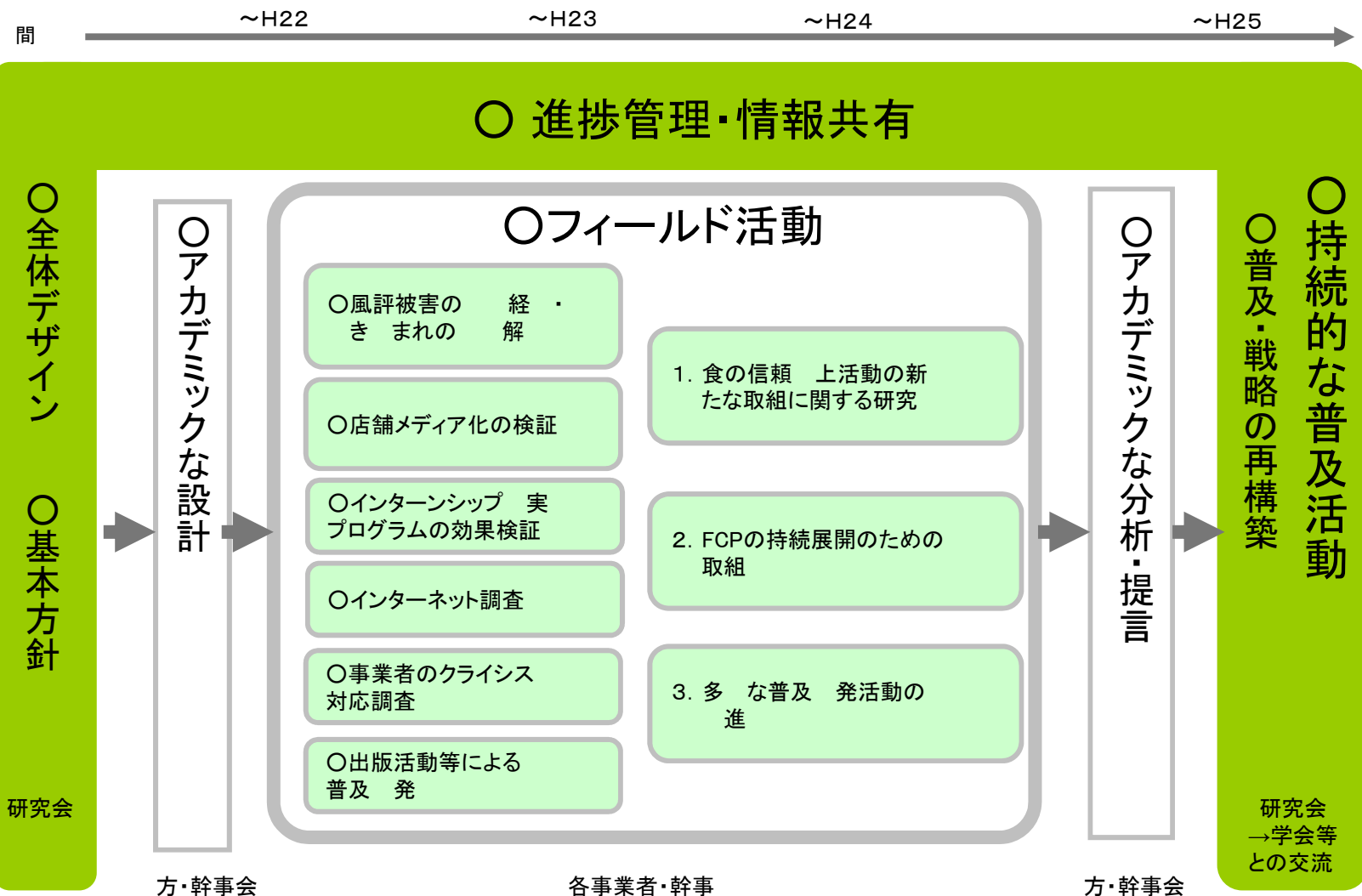
■研究テーマ1①～④の関連



2. 研究活動の流れ

研究活動の流れと各主体の役割を以下のように想定します。

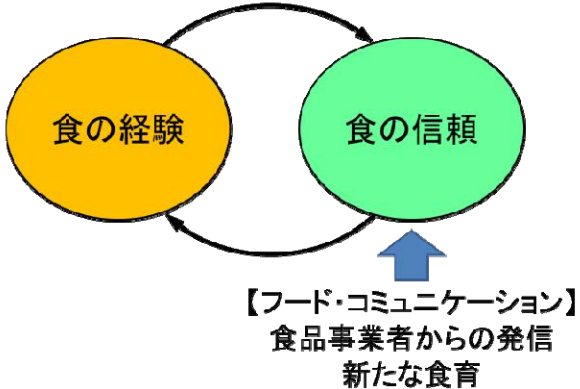
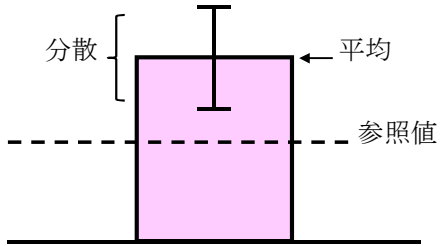
【FCP普及・戦略研究会】



幹事会のメンバー構成

- 中 東京大学大学院
- 知 森中 学院大学
- 政策研究大学院大学
- オラクルひとしくみ研究所 表
- ひ み 東京大学大学院
- 中 幹 東京農業大学 農 支援センター 学 研究
- ()アール・ピー・アイ 表取 役

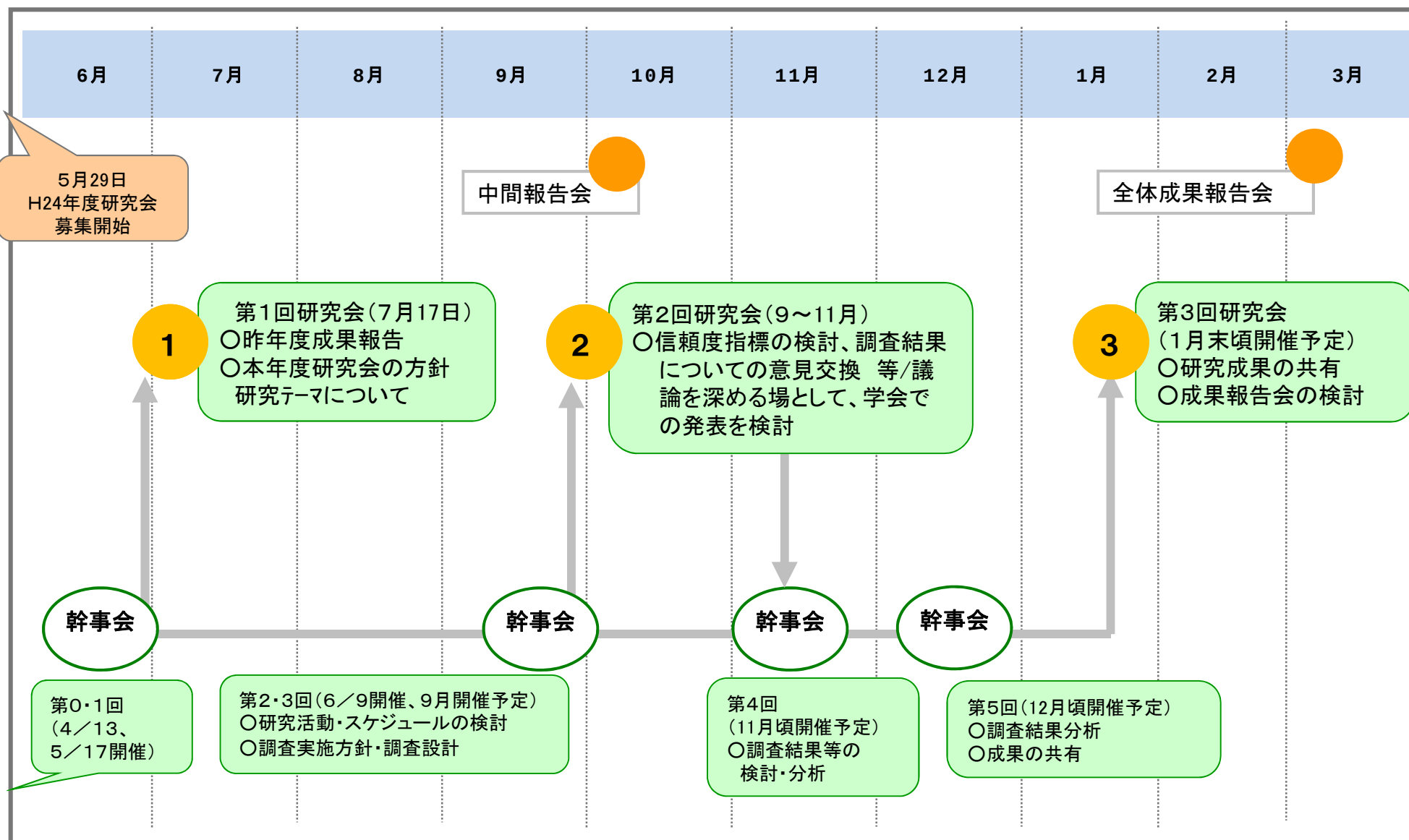
各研究テーマにおいて必要なフィールド活動・調査及び、成果・アウトプットを以下のように想定します(～H24年度)。

研究・活動テーマ	成果・アウトプット(予定)
1. 食の信頼向上活動の新たな取組に関する研究 <研究テーマ> ①「食の信頼論」についての検討 ②食の事件・事故の風評被害等に関する影響評価 ③食の信頼回復・向上のためのシステムの開発と評価 ④消費者との対話手法の開発と評価	1. 信頼度指標の開発(テーマ1 & テーマ4) ■食の信頼論(2010年度の結果): 「食の経験」を補完する「食の信頼」 経験と信頼のループを強化する、復活させる  ■食の信頼論(2011年度の結果): フードシステムにおける 食のステークホルダーの行動への信頼  ■信頼度指標(2012年度での課題) ・協働の着眼点の約120の項目から信頼度指標構築のための項目を抽出 ・手法 －消費者グループインタビュー －消費者WEB調査 －事業者アンケート調査 ・課題 －事業者の認識と消費者の評価における乖離の有無を確認 －3パラメータの把握(信頼度の平均、分散、参照点) 

	2. 店舗メディア化プロジェクトⅡ（テーマ2&テーマ3） ■POPによる信頼改善効果測定（2011年度の検証） ・手法・手段の開発 ・関係者の関与の方法について検討 ・可能性と限界の検討 ■2012年度検討課題の一例： ポスト3. 11「風評被害」への対応 ・食品事業者にとって議論の多い課題 ・新基準値への対応を例にとると →フードシステムにおけるあらゆるステークホルダーが適切な行動をとっていることのコミュニケーションが必要 ・目的 －東日本農業・漁業の支援 －食品事業者の負担を軽減 ・課題 －科学と行政への不信が新基準値の機能しない理由 －新基準値への真の理解のためにあらゆる機会・場を利用したコミュニケーションを模索 リスク評価機関 科学者 リスク管理機関 行政 食品事業者 消費者 リスク評価 リスク管理 リスク制御 リスク回避 消費者的意識としては、対象とする食品を食べたいかどうか単純に知りたいだけであって、分析的な議論は避けたがり、直截的結論だけを求めている。 リスク認知 ↓ 最終判断
2. FCPの持続展開のための取組 ①学会等との交流・連携の可能性検討 ②普及活動の再構築	FCP活動の持続性を高めるため、普及内容や学会等との交流、連携の可能性を検討した上で、H25年度以降の普及活動のあり方を再構築する。
3. 多様な普及啓発活動の推進 ①出版活動による普及啓発 ②facebook等のIT活用による普及啓発	昨年度に引き続き、雑誌・機関誌・学会誌等への寄稿、新書等の出版、face bookコミュニティの拡充と有効活用を行う。また、商談会・展示会シートをはじめとしたFCPツールの活用促進を図る。

3. スケジュール

研究会は年間3回開催し、幹事会は5回程度開催する予定です。



◆参考資料：H23年度 参加企業／団体

H23年度、本研究会にご参加いただいた企業・団体は以下のとおりです

株式会社アール・ピー・アイ【幹事】

株式会社アイ・エス・レーティング

青森中央学院大学【幹事】

味の素株式会社

イオン株式会社

株式会社イトーヨーカ堂

社団法人インターナショナル・バリュー

マネジメント協会

オラクルひと・しくみ研究所【幹事】

有限会社唐澤事務所

株式会社きたかわ商店

キューピー株式会社

株式会社鶏卵肉情報センター

株式会社ケット科学研究所

有限会社ケンプランニングオフィス

サントリーホールディングス株式会社

株式会社シグマクシス

株式会社スコラ・コンサルト

株式会社生活品質科学研究所

株式会社高島屋

合同会社TFMHY研究所

テーブルマーク株式会社

東京大学 食の安全研究センター【幹事】

日本マクドナルド株式会社

ハウス食品株式会社

株式会社 4CYCLE

三菱商事株式会社

FCP 普及・戦略研究会の今後の活動展開に関するご提案

平成 24 年 7 月 17 日

FCP 普及・戦略研究会幹事会

FCP 普及・戦略研究会は、「産官学協働による FCP の自立的展開を促すため、FCP の普及に関わる研究と戦略的取り組みを行うことを目的」として活動して来ました。

今までの活動経緯も踏まえ、平成 24 年度の活動計画案には、「FCP の持続展開のための取組」として、「学会等との交流・連携の可能性検討を行う」ことを位置づけているところです。

これは、FCP の取り組みに関して、科学的に研究する「学」の活動と、ビジネスを実践している「産」の活動等の結びつきを強化することによって、今後の FCP の自立的展開の可能性を高めることが出来ると考えたためです。

具体的には、

- 1 研究者から、食品事業者や関連事業者、消費者、行政担当者等に有益と考えられる食の信頼に関する最新の研究成果を報告する機会を設けること
 - 2 食品事業者や関連事業者、消費者、行政担当者等から、研究者に対して、実務上求められている研究テーマを提案する機会を設けること
 - 3 1・2を踏まえて、食の信頼に関する課題を解決するための新たな社会的技術・制度等（以下「フード・コミュニケーション」という）について、研究の企画を検討する場を設けること
 - 4 上記のほか、フード・コミュニケーションや関連する新たなビジネスを生む活動が創発することを促すため、関係者の交流の機会を設けること
- にチャレンジしてはどうかと考えます。

このチャレンジの取り掛かりとして、まずは、フードシステム学会の企画との連携に取り組みたいと考えています。

フードシステム学会は、「社会科学を中核に食品工学、食品学、栄養学、食文化論等との学際的な研究と、食品産業界、食品行政当局と学者研究者との間で官産学共同の研究を推進する」組織（会則より抜粋）であり、過去にも FCP に関する研究会を開催した実績があります。

現在、学会の秋季研究会（11 月 17 日開催予定）で FCP に関連するテーマを取り上げることが計画されているため、これを当研究会で提案する活動を発展させる機会と位置づけて、今後、企画案の提案や参加者の募集等を行い、同研究会を成功に導きたいと考えます。

さらに、当研究会として、この秋季研究会に関連する活動に加えて、参加メンバーの皆様のご意見や農林水産省 FCP 事務局のご助言をいただいて、フードシステム学会との連携強化を有力な柱と位置づけ、今後の FCP 活動の持続性を高めることを検討、提案していくこととしてはどうかと考えております。

第 2 回 FCP 普及・戦略研究会の概要報告

日時： 平成 24 年 11 月 17 日（土）13：00～18：00
場所： 東京大学 弥生講堂一条ホール
出席者： 91 名事業者/組織/研究者 （※本研究会以外の出席者を含む）

<議事次第>

2012 年度 日本フードシステム学会秋季研究会 との合同開催

■研究会テーマ 「フード・コミュニケーションの未来」

■プログラム ＊敬称略

1. 日本フードシステム学会会長挨拶
斎藤 修（千葉大学大学院）
2. フード・コミュニケーション・プロジェクト事務局 挨拶
西 経子（農林水産省食料産業局 企画課食品企業行動室長）
3. ご講演
 - 1) 「フード・コミュニケーション：FCP から発展した新たな概念」
中嶋康博（東京大学大学院）
 - 2) 「FCP 研究会・勉強会の平成 24 年度の活動について」
西 経子（農林水産省食料産業局 企画課食品企業行動室長）
 - 3) 「FCP 地域ランチにおける産学官連携：岩手ランチの取組から」
塩谷未知（青森中央学院大学）
 - 4) 「企業の信頼指標構築の取組：FCP 協働の着眼点を利用して」
細野ひろみ（東京大学大学院）
 - 5) 「FCP における協働の枠組みの構造と発展可能性」「ワークショップの進め方の説明」
神井弘之（政策研究大学院大学）
4. ワークショップ「産学官連携による食信頼向上へ向けた新たな取組の可能性」
5. 閉会挨拶
安倍澄子（日本女子大学）

<議事概要>

岩手大学の佐藤先生の司会進行のもと、はじめに日本フードシステム学会会長の斎藤先生より、開催のご挨拶をいただきました。

また、農林水産省フード・コミュニケーション・プロジェクト（FCP）の西室長からも、ご挨拶をいただきました。

次に、上記のプログラムのとおり、西室長をはじめ、「FCP 普及・戦略研究会」の幹事である 4 名の方々からご講演をいただきました。

まず、東京大学の中嶋先生より、FCP のこれまでの経緯や研究結果についてご紹介をいただき、社会技術としてのフード・コミュニケーション（FC）の可能性などについてご説明がありました。

次に、食品産業ビジョンや、FCP 研究会・勉強会の今年度の活動について、西室長からご説明がありました。

また、FCP の地域ブランチのなかでも、岩手ブランチの取組について、塩谷先生からご説明がありました。

続けて、企業の信頼指標構築の取組に関して、3 年間に渡って実施されてきたヒアリング調査やインターネット調査の結果について、細野先生からご説明がありました。

ご講演の最後には、神井先生から「FCP における協働の枠組みの構造と発展可能性」をテーマに、「競争と協働」の違いや「協働で作成されたツール」などについてご説明をいただいた後、ワークショップの進め方についてもご説明がありました。

ワークショップでは、6 つのグループに分かれて、これまで FCP でのワークショップの実施経験が豊富なファシリテーターの方々による進行で、食の信頼向上のための産学官連携活動の可能性と新たな課題である「FC」について議論が行われました。

具体的な進め方としては、先の 5 つの講演の発表内容で「大切だと思うこと」「興味をもったこと」をそれぞれが発表・共有した後、今後、産学官連携で「一緒にできること」「期待すること」を発表・とりまとめを行いました。グループでの議論が終了した後、全体で集合し、各グループの議論の結果について、発表がありました。各グループの主な結果は以下のとおりです。

- ・ グループ 1：まず、FCP の普及に当たって、消費者目線でのコミュニケーション、中小企業の参加拡大、人材育成等が重要との認識が共有されました。これを受けて、多様な手法を用い、多様なステークホルダーを巻き込んだ普及を行おうとする際に、社会としての価値観の共有が必要ではないかという意見交換が行われました。例えば、消費者の求める高品質と過剰品質のギャップの問題、生産額 100 兆円を 120 兆円に増やすという目標の是非などが話題になりました。具体的に協働でやってみたいこと、期待することとしては、消費者教育ではない生活者「共育」、企業人が消費者の立場から参加する場の運営、協働によるソーシャルビジネス、SNS 等の手法を用いた消費者コミュニケーション、知りたいこと・伝えるべきことの意識調査、FCP の取組の費用対効果分析などが提案されました。
- ・ グループ 2：食の価値の判断は、その本質がどうであれ、外部からの評価によって大きく左右されしまう。また、食の安全は、食の価値を考えるうえで基礎となる要素である。食品に関わる事業者は、有事の時ばかりでなく、平常時から、食の安全に関する取組をきちんと伝えられるよう、また、それを評価できるようなコミュニケーションをしていくことが重要である。これらのことを踏まえて、公共財としての FCP のシステム化や社会技術の有効性に注目し、食の安全については、利害関係を越えられるのが食品業界の特徴であり、これを活かしていくことが大切である、との議論がされた。
- ・ グループ 3：現在、少子高齢化の変化において 100 兆円→120 兆円の実現には、消費者を起点とした価値創造しかない。基盤となる食の安全確保においては「協働」して取り組み、そのフィールドに立てることで健全な「競争」ができる。6 次産業化、農商工連携、フードアクションニッポンなどを縦割り行政に埋もれることなく、フード・コミュニケーションという概念でそれらを包括する新しいカテゴリーを示しうる。地域行政のための「協働の着眼点」の可能性もあるのではないかと。消費者コミュニケーションは大事なテーマであり、食育という視点でも今までにない双方向のコミュニケーション体制が考えうる。つまり、消費者も参加できる新しい FC が必要ではないかと、との議論がされた。

- ・ グループ4：FCP（およびツール）が社会技術として成立することを目標とするならば、FCP は多様な主体が参加出来るオープンイノベーションの場となる必要がある。その為には社会情勢の変化による様々な食の課題を取り込み、その課題解決につながる柔軟なシステムを組まなくてはならない。しかしながら、現状のFCP では参加する主体の偏りに加え、完成したツールへのアクセシビリティの低さ、再編集が出来ない構造などオープンプラットフォームとしての利用はまだ遠い。震災の影響やグローバル化といった社会の変化に対するスタンスも検討の必要がある、との議論がされた。
- ・ グループ5：食に関する消費者のリテラシーに向上には、FC・FCP が重要であると確認した。ついで今後のグローバル化を含めたFCP の普及について、まずBtoBの取引において知ってもらうことと放射能汚染への対策に活用することがポイントになり、FCP への「学」の関わりは評価から設計や応用の段階に来ているとの認識が共有された。
- ・ グループ6：FCP によるこれまでの取組みでは、協働のプラットフォームをつくり、協働を進める各種のツールを開発してきた。しかし、消費者は一つではなく低信頼グループの信頼向上や日々の業務における信頼向上のための課題は尽きない。特に、国際化や6次産業化に向けた生産者の巻き込みが重要になっている。今後は、知っている量と質を増やし、繰り返し継続していく中で、生産者への個別コンサルティング、チェーンをつなぐコーディネータの養成、FCP の考え方をわかりやすく伝えるスキルの改善、食農(商)教育の推進、規模や産業分野に応じた消費者との最適コミュニケーション方法の確立など、それぞれのツボを探して「コミュニケーション技術を開発」していきたいという意向が共有された。

最後に安倍先生のご挨拶で研究会を閉会しました。

（文責 RPI）

＜配付資料＞

プログラム、講演内容についての配布資料

※資料：研究結果は論文発表後に公開予定です

以上

第3回 FCP 普及・戦略研究会の概要報告

日時： 平成 25 年 2 月 1 日（金）15：00～18：00

場所： 政策研究大学院大学 1 階会議室 A・B

出席者： 28 事業者/組織 31 名

<議事次第>

1. 開催のご挨拶
2. 本年度の研究・活動報告
 - 1) 秋季大会開催結果報告
 - 2) 本年度の調査結果報告
3. 普及促進に向けた課題の検討
 - 1) 3 年間の研究成果と課題
 - 2) 産学官連携による普及活動の展開
 - 3) その他の検討事項
4. 閉会のご挨拶

<議事概要>

本研究会の幹事企業である（株）アール・ピー・アイ長澤の司会進行のもと、はじめに「FCP 普及・戦略研究会」の幹事である、東京大学食の安全研究センター副センター長 中嶋先生より、開催のご挨拶をいただきました。

次に、政策研究大学院大学の神井先生から、11 月 17 日に第 2 回 FCP 普及・戦略研究会と同時開催された「日本フードシステム学会秋季研究会」について、全体概要と、神井先生の講演内容（FCP における協働の枠組みの構造と発展可能性）についてご紹介いただきました。また、青森中央学院大学の塩谷先生からも同様に、秋季研究会の講演内容（岩手ランチの取組から）についてご紹介いただきました。

続けて、東京大学の細野先生より、今年度の研究結果として、企業を対象に実施したインターネット調査と、消費者を対象に実施したインターネット調査の集計・比較分析結果についてご説明があり、食品事業者と一般消費者における視点の違い（ベーシック 16 の項目を活用し、食品企業の信頼向上につながる取組を評価）などについての中間結果のご紹介をいただきました。

次に、3 年間の本研究会における研究活動内容や今後の課題について、中嶋先生よりご説明がありました。

また、日本フードシステム学会の秋季研究会の結果を踏まえて、産学官が協働して研究活動に取り組むフード・コミュニケーション部会の立ち上げを計画していることについて、神井先生からご説明がありました。

以上のようなご説明内容について、参加者の皆さまからも、ご意見をいただきました。

主な内容は、以下のとおりです。

- ・ 「フード・コミュニケーション」を、表示だけでなく、伝達方法を含めて、幅広い意味でとらえて、今後の研究テーマ・課題とされていることがわかった。
- ・ 3年間の研究成果について、関心を持った。今後、食品についての新たな価値観を生み出すような提案・コーディネートがなされることに期待する。
- ・ フード・コミュニケーション部会を立ち上げるということについては、賛成である。ただ、現在の日本フードシステム学会のように、年2回の開催だとスピード感がないように思われるため、フード・コミュニケーション部会はより頻度高く開催する方向で検討して欲しい。
- ・ 民間企業におけるお客様との「コミュニケーション」は日々変化しており、スピードが早いので、食品企業は様々な努力をしている。今後、産学官連携を進め、情報を共有し、研究を重ねることによって、将来のコミュニケーションについて、示唆が得られるとよいと思う。
- ・ 標準化などについては興味もあり、食品産業全体の底上げになるような研究については意義を感じる。ただ、企業の一員として、農林水産省がリーダーシップをとっている研究会という位置づけを離れた学会活動に参加する場合、会社の理解を得られにくいことも懸念され、賛助会員となることについても難しいかもしれない。あくまでも、F C Pの活動の一環ということで、すすめてもらえれば、自分としては参加しやすい。
- ・ 日本フードシステム学会とF C Pとの関わりが公にも明確になるような方法について、検討してもらえればと思う。例えば、日本フードシステム学会がF C Pの情報共有ネットワークに登録されたり、現在のF C Pのホームページにフード・コミュニケーション部会の活動報告が掲載されたりして、活動の一環に見えるような方法が考えられるのではないかな。
- ・ F C Pの全体の枠組みの中で、フード・コミュニケーション部会が担うべき役割を慎重に検討する必要がある。
- ・ 普及をすすめていくためにも、研究者の方と一緒に活動していくような場ができることは、大いに賛成である。これまでも、研究活動から示唆を得られ、役立ったこともあった。

次に、第1回の本研究会で、ご意見のあった「F C Pピンバッチ」をF C P事務局の了承をいただきながら、有志で作成した件について、東京農業大学の中山様からご紹介をいただき、参加者の皆様からのご意見をいただきました。

- ・ 商談会等で、企業間のコミュニケーションのきっかけになればよいと思う。将来的には、消費者もバッチをつけて、お店の人とコミュニケーションがとれるようになるとよいと思う。
- ・ 子供も付けやすいように、次回は、缶バッチも作成してはどうか。
- ・ ピンクリボンなどのように、「〇〇という活動にコミットしている」という意志を表現することが、昔よりも増えたように思う。今回のバッチもF C Pに賛同していることを表明するツールとして、広く活用してもらえばよいのではないかな。

最後にF C P事務局の西室長から成果報告会のご案内などのお話や、オラクルひと・しくみ研究所代表 小阪先生からもご挨拶をいただき、第3回F C P普及・戦略研究会を閉会しました。

(文責 RPI)

<配付資料>

- 資料1 参加者名簿
- 資料2 秋季研究会資料① 「F C Pにおける協働の枠組みの構造と発展可能性」
- 資料3 秋季研究会資料② 「岩手ブランチの取組から」
- 資料4 3年間の研究成果と課題
- 資料5 日本フードシステム学会フード・コミュニケーション部会立ち上げについて

以上